

書評

伊藤徹編

『作ることの日本近代 一九一〇—四〇年代の精神史』

(世界思想社、2010年)

宮野真生子

近年、研究の「学際性」が求められ、ジャンル横断的な言説が増えてきている。たしかに、「学際性」というプリズムを通して露わになる事態のスペクトルを見ることは知的興奮をもたらすし、たとえば、私たちはそこで歴史の隠れた側面に出会うことができるだろう。しかし、その「出会い」が意味するところのものは一体何なのか。あるいは、「出会い」の新奇さに喜ぶのは、「学際性」という言葉のマジックに惑わされているだけではないのか。問題は、「歴史を問う」という行為がそもそもどのような行為であり、そこで「学際的である」とは何を意味するのかという点である。この点を問わないままに、ジャンルを横断していくとき、それは単なる比較に止まり、新奇さはあっても、事態の核心へと迫る力に欠ける。

『作ることの日本近代 一九一〇—四〇年代の精神史』と題された本書は、哲学から政治、文学、芸術、建築に至る、まさに学際的な立場から歴史を問うことを目指すものである。だが、この書で試みられる諸探究は、決して単なる比較や視点の新奇さを競うものではない。序において編者の伊藤徹が、「歴史として伝わっている過去とは、常に語り手の現在に存在し、問題として私たちに挑み、問いかける一かつてあった人間のあり方を、いま一度、己れの生の可能性として、どこまで考えうるのか。私は、そのような問いが執筆者たちに受けとめられることを編者として願った」(4頁)と言うように、各論考において、過去への問いかけは、現在へと差し戻され、いまを生きる私たちの足元を照らし出してくる。もちろん、それは、近ごろ耳にする戦前と現代が似た状況にあるというような類似性を確認する作業などではなく、「過去との本質的な共通性、類似性を生み出した時代の普遍的運命にまで遡る仕方です精神的形象に問いかける」(6頁)ことで、現在を生きる私たちの地盤へ迫る営みである。このような遡

及が、「作ること」「無」「個人」をキーワードとしておこなわれることで本書は構成されている。すべての論考は、単なる思弁に止まるものではなく、具体的事象や実践に沿う形で語られているが、本書評では見取り図を提示するためにも、事象の基礎となる普遍的なものに迫ろうとする論考と、実践に沿うことで、当時の限界点を明らかにし、現在へと接続する歴史的論考、という二つのタイプに分けて論じる。では、まず前者の論考を見ることで、過去から時代の普遍的運命に遡り、その普遍的運命が具体的に時代のなかでどのような変容を被っていったのかを後者の論考からたどっていきこう。

第1章「深淵をなぞる言語—夏目漱石『彼岸過迄』のパースペクティヴィズム」は編者伊藤の手によるものである。ここで伊藤は、『彼岸過迄』において、漱石がとる短編の連鎖という手法が、出来事を超越的に俯瞰する視点を設定せずに、登場人物それぞれの視点から語らせることで、人が不可避的に持つ視点の有限性を明らかにするものであったことを指摘する。視点の有限性を通して明らかになるのは、千代子と須永の関係に代表される、人間関係が孕むズレであり、それに直面したときの人間の無力さである。この無力さの背後にあるものを、伊藤は「視野の限界の向こうに拡がり、偶然的な関係の生成を可能にさせ、人間に働きかける「無形の運命」(27頁)と呼ぶ。「無形の運命」と呼ばれるものは、時代を問わず生の根柢に潜むもの(「存在論的な無底性」)だが、一方で、生の地盤が共有されていた近代以前においては隠されており、近代化・産業化の進展が有用性を徹底化するなかで露わになってきたものである。しかし、人は生の無底性とどまるより、それを形あるものとすることで安定したいと望む。白樺派の言う自然や、あるいはマルクス主義の流行、そして国家主義の勃興も生を蝕む無に形を与えることで自己を守る試みであったと言えるだろう。このような「神話の産出による「無形の運命」の隠蔽」を剥ぎ取る稀有な可能性を漱石の『彼岸過迄』のうちに見た伊藤は、最後に「虚構性としてあらわになる「生の深淵」を、語りえないもの、したがって覆うことのできないものとして指し示

す方が、なお語るの内に残っていないか」(30頁)と課題を提示して論を閉じる。この課題を別の角度から深めていくのが第6章の「虚無のなかの構想力—三木清・技術哲学の立場」(秋富克哉)である。第1章では、「作ること」によって、生を蝕む無を隠蔽し生きていく個人の有り様が指摘されていたが、「無」と「作ること」の関係はこのような「我有化」の側面だけなのか。これに対し、秋富は三木清の『構想力の論理』を手掛かりに論を進めていく。人間を中間者と捉えた三木にとって「無」は決して避けるべきものではない。彼が求めたのは「本来の無」へと至ることであり、そこで「作る」という働きは重要な役割を担うはずだった。だが、その論点は三木の死により途絶した。この完遂しなかった試みを、秋富は、『構想力の論理』において書かれなかった「言語」の問題と遺稿『親鸞』を手掛かりに、掘り下げていく。三木によれば、無は「人間を全体として超越するもの、存在の根拠」だが、さしあたり人が出会うのは「虚無」である。中間者としての人間は、自らの無底性を通し、虚無を感得する。この虚無に対抗し克服しようと人間はロゴスを求め、作るという行為へ向かう。そこに成り立つのが主体性である。いわば、「パトス的に出会われる虚無は、「虚無からの形成」としての行為を規定する」(162頁)。こうして、ロゴスは主体性の形成に寄与するのだが、言語とはこのようなロゴス化に尽きるものではないと、秋富は言う。たとえば、浄土教に見られる、自力が挫折し、名号が与えられるなかで弥陀と出会う経験は、作ることの届かない言葉の有り様を明らかにする。このロゴス化の破綻において私たちはようやく「本来の無」に出会う可能性を手に入れることができるのではないか。もちろん、このような言葉の形が与えられるのは、自力の果てにおいてである。それゆえ、秋富はロゴス化の努力のなかで、虚無を持ち堪えることの重要性を訴える。「個」において、「作ること」と「無」が切り結ぶ関係がこの論文では明らかにされている。

だが、個人や作ることに虚構性がつきまとうとしても、私たちは一人の人間として行為を紡いで生きていくしかない。単に虚構性を摘発するだけ

であれば、「経験の事柄を発掘し、己れの問題として引き受ける責務から逃避することではあるまいか」(62頁)と、第3章「個性」の来源—萬鉄五郎・生ける静物」で伊藤は述べ、個であることの可能性を探っていく。私たちは「個性」というと、他とは異なる独自性・唯一性を思い浮かべる。伊藤は、このように「他との差異」というかたちで個性を捉えること自体が一たとえば天才の個性を精神病と結び付けるような—、すでに特殊を一般に解消することではないのかと批判し、「個性」は類似や相違といった関係以前に、作家の制作という現在に発生した出来事」(69頁)として捉えるべきだと言う。そこで彼が取り上げるのが、萬の描く「静物」、静物でありながら、今にも妖しげに動き出しそうな「生ける静物」である。静物は、描き手の視線の前で静止することをせず、描き手の統御を超えて動き回っている。「主体は、いわばそれに脅かされている」(74頁)。主体を越える世界の有り様は、萬が描く《目のない自画像》にも表れるものだ。視線によって世界を統御できない主体の前に、ものは単に色と形として現れ、目はただそれを正直に受け入れ、萬はそれを描くしかない。いわば、彼は、描くという行為によって、このような意味化以前の色とかたちとの一回的な出会いを果たすと言える。そのとき、「自己は「内部」としてイメージされるものではなく、描くというあり方において、すでにもものとともにある」(80頁)。このような「個性」は、私たちが一般にイメージする「～らしさ」というものとは全く異なり、ものと出会うことで与えられる一回的な経験であり、「意味化以前の場所」(82頁)を開示するものである。個の先で出会う原初的なものへのまなざしは、第7章「運動としての「模倣」—中井正一の挑戦」(長妻三佐雄)で再び取りあげられる。中井は、「超越的な存在や「普遍的実在」を前提としない近代的な合理主義が、「独創」と「自由」の名のもとに、「放恣」や無方向に陥る危険性を有している」(174頁)ことを捉え、そこに近代の人間が抱えてしまった方向性の喪失と空虚さの原因を見た。そして、生の意味の回復を求めて、「模倣」という行為の可能性を探っていく。私たちは「模倣」や「模写」と聞くと、手

本を写すというふうイメージしがちだが、中井の言う「模倣」や「模写」はそのような普遍的実在を前提としない。スポーツの「フォーム」がそうであるように、意識してフォームを真似ている限り本来の実力は出せず、フォームが身体化したとき、はじめて型が自然発生的に生まれてくる。この型を通じて、ひとは「自分」を知ると同時に、そこに「人間的方向」が示され、「秩序」が浮き彫りになる。原像なき模写の先で開示される「人間的方向」は「人間の作為によってコントロールできるものではなく、自生的に形成されてくるもの」(185頁)であり、その手前には「人間的原方向」がある。しかし、「人間的原方向」はあらかじめ定められた普遍的実在などではなく、あくまでも運動のなかで方向性を示すだけのものである。それゆえ、人はつねに型を反復しつつ壊しながら、その方向性を追求することで、「自分の中の根」へと降りていくことができる。このような中井の語る「模倣」は、「人間主体による作為を超えた豊かで躍動的な秩序を生み出す」(191頁)「作ること」の別な可能性を開示するものであったと長妻は論を閉じる。

人は無や空虚のうえて、作るという営みを通して個としての生を紡いでいく。それは時に虚構の危険を孕み、しかし一方で、作りえないものへの可能性を切り拓く。1910~40年代、このような可能性に賭ける試みが様々におこなわれ、そして、時代の流れに飲みこまれていった。時代の流れは二つの方向から押し寄せた。一つは、「近代/反近代」という枠組みをもって。もう一つは「日本」という神話とともに。前者の問題を明らかにするのが、第2章「作り手の深層—柳宗悦における神秘と無意識—」(竹中均)、第4章「近代的知の臨界—高田保馬の利益社会化の法則—」(荻野雄)、第9章「手仕事の近代—地方の手工芸と一九三〇年代—」(土田真紀)である。土田と竹中が取り上げる柳宗悦が、名のある個人による芸術制作ではなく、無名の工人による手仕事に着目したとき、たしかに彼はいわゆる近代的な「個性」崇拜から離脱しているように見える。雑器の美は、個を捨て、他力に任せるところで、その手から自然に生み出される形象に宿る。作ることの個人性ではな

く、むしろ無名性において美は成立し、そこで重要なのは「他からの力」なのである。だが、竹中が指摘するように、この他力の発見は、若き柳が無意識に興味を持ち心理学を学び、また神秘主義にも興味を示していたという根本的関心があったのものではなかったか。ユングの「集合的無意識」の発見が1916年ごろから始まる一方で、柳の民藝をめぐる言説は1921年ごろから開始されるのも、その意味で同時代の学問の潮流のなかにあるということもできる。それは近代化が進むなかで現れた、反近代の立場であったと言えるだろう。だが、30年代に入り、ブルーノ・タウトやシャルロット・ペリアンがモダニズムの立場から日本の工芸に接近し始めたころから、奇妙なねじれが生まれてくる。この点を問題にするのが土田である。タウトやペリアンは、日本の伝統工芸がモダニズムの理念にかなう普遍性を備えていることに注目する。一方で、柳にとって東北の農民が作る蓑に代表される手仕事は、その地方の生活に根差すゆえ美しいものであった。柳において手仕事とは、近代的な「都市」に対するネガ(=反近代)の意味を持つものなのである。だが、地方の手仕事が生き残るためには、都市の消費文化に基づく需要が必要だという皮肉がそこにはあり、さらに地方における近代化の遅れを反近代に立つことで挽回しようという意図も隠れている。いずれにしても、土田が指摘するように、「さまざまな脚光を浴びることにより、当の「手仕事」が、それらを現実に必要としてきた農村の生活や、各地方に根づかせてきた自然条件や歴史的経緯から決定的に切り離され」(247頁)、近代とそのネガとしての反近代のディレンマのなかで、「手仕事」は観念化していったと言えるだろう。当初捉えていた事柄が次第に観念化し、硬直化するという事態は荻野が取り上げる高田保馬においても見られることである。しばしば「大正デモクラシー」の産物と言われる高田の理論であるが、荻野によれば、高田の利益社会化の法則とは、「資本主義によって刻印された近代が自己解体に至る不可避的な筋道の剔抉へと、定位づけられ」(91頁)たものであった。近代的自我の根柢に「力の欲望」を見た高田にとって、利益社会とは自由主義的な社会ではな

い。むしろ、私益を徹底し、それぞれの利益のみから他者と関係することで、他者より優位を目指す「力の欲望」から離脱して、社会的な公正が可能となった社会を意味していた。その先で高田が見たのは、欲望に駆られ物や他者を支配しようとする主体のあり方ではなく、「力の原理から離れているがゆえに人間が近代と違った仕方自然を経験する世界」(110頁)であった。だが、彼のこの論は、時代の流れに巻きこまれるなかでいつしか実体化していく。荻野が指摘するように、「自らの社会法則を歴史のまさに根源的原動力、自然それ自身の動向をつかまえたものと想定するとき、彼は知によって世界を隈なく統べようとする近代的主観の圏内に引き入れられて」(113頁)いったのだ。歴史を問うものにとって、高田が陥った問題点は見過ごすことのできないものである。

一方、「日本」へと引き寄せられていった試みについて論じているのが第5章「〈生命〉探求の教育—小原國芳の修身科教授論—」(岡部美香)、第8章「神話の造形—保田與十郎と知/血の考古学—」(西村将洋)、第10章「一九三〇—四〇年代の建築における「日本的なもの」と行為概念」(笠原一人)である。その典型とも言えるのが、西村が取り上げる保田である。保田が『古事記』『万葉集』後鳥羽院と古典を連ねるなかで見出していった連続性を実証的に裏付けることは困難であり、いわば、それは〈日本〉というひとつの神話の創成であった。ただし、西村が指摘するように、この保田の〈日本〉は「フランス革命やソシール言語学、モダニズム詩学のポエジーなどの要素との関係性の中で構築されており、すでに〈非—日本〉に浸食され」(214頁)たものであり、その虚偽性を十分に理解していたからこそ、保田は「日本のイロニー」として日本浪漫派の主張を語ったのだろう。しかし、「日本」と実際に名づけたとき、「超越的に世界の成り立ちを語る(神話)は、〈親和〉の物語」(218頁)となり、虚偽性を見据えていたはずのイロニーもまた損なわれてしまう。このような「日本」の具体的な経験が、建築における行為概念の導入によって可能になったことを論じるのが第10章の笠原である。身体による建築の体験を叙述する堀口捨己の茶室の記述や

浜口隆一の「日本国民建築様式」を確認した笠原は、行為という身体を経験から建築を捉えることは、「日本の固有の空間に、国民の身体そのものが同化する」(271頁)回路をもたらすものであり、ナショナリズムへと接近するものであったと指摘する。また、「日本」や「国家」を語ることで、自らの思想に軛をかけてしまったのは、第5章で論じられる小原も同様である。子どもたちの「個性」を伸ばすべくおこなわれた「出来事としての授業」の実践は、授業のなかで普遍的な意味をあらかじめ設定することなく、出会いにおいて生まれる差異やズレが響き合うことで、個々の子どもたちが真理の意味をゆっくりと形づくっていくという魅力的なものであった。しかし、このような教師自身が試されることになる実践の背後には、国家から個人までを包摂する〈生命〉という普遍が設定されていた。こうして、小原の教育思想は個性の発展を謳いながら、国家主義的訓育の強化を可能にするものになっていったことを岡部は明らかにする。

自らも時代の中に生きる人間として、歴史を振り返りながら、普遍的現象に近づこうとする論者たちの試みのあと、編者の伊藤は「あとがき」で改めてこう問いかける。「歴史を観察する者が、当の歴史過程に対してどのような位置に立っているのかと考えてみたとき、過去から切断され歴史を外から眺める非歴史的な空間、いってみればレンズのこちら側のシェルターに観察者が佇んでいる可能性はないだろうか。……「作る」ということへの着目は、元来、そうした可能性の回避をも命ずるものであったはずなのだが、はたして本書の編集は、それをどこまで具現できたのだろうか」(292-3頁)。歴史のなかで作られたものの虚構性を撃つとき、糾弾する側がある種の特権的な位置に立ってしまう危険性が生まれるのは否めない。特権的な位置に立たずに、己れの立つ場所をも捉え返すような語りはいかにして可能なのか。伊藤はその難しさを口にするが、私はまさにこの本のスタイル—問題意識を共有する様々な研究者たちの共同研究—がそれを可能にしているのではないかと感じる。たしかに、個別の論文の圏内に止まるかぎり、伊藤の指摘する問題点をクリアす

るのは容易ではないだろう。しかし、1章の漱石論が6章の三木論で深められ、3章の萬論が7章の中井論で別の可能性を与えられたように、ここにある論文はそれ単体で完結することなく、他の論文へと繋がり、そのなかで新たな側面を見せてくれる。全体としてこの論文集をみたとき、あたかも論文同士の対話があるかのようであり、このポリフォニックな言説の有り様は、たとえば、中井の考えた対話によって秩序の形成を目指す「委員会の論理」を彷彿とさせる。研究者は、論文集を前にすると、とりあえず必要な論文だけを読み、論文集それ自体のコンセプトを疎かにすることがないだろうか。一方でそれは、論文集が単なる論文の寄せ集めになっていることが多いことの証左でもある。しかし、本来、共同研究をおこない、論文集を編むということは、ジャンルを横断しながら、自らの視点を相対化しつつ、そのなかで普遍的な事象へと近づこうとする営みであるはずだ。その意味で、『作ることの日本近代』はあるべき論文集の面白さを教えてくれる。もちろん、ポリフォニックな言説のあり方だけで、編者の伊藤が提示した歴史を分析する特権的視点の問題を解決することはできない。だからこそ、「作ること」をめぐる研究は、現在「一八九〇—一九五〇年代日本における《語り》についての学際的研究」へと引き継がれている。次なる彼らの取り組みで、どのような「語り」の形が明らかになるのだろうか。その期待を胸に書評を閉じたいと思う。